

リンゴの着果痕を伝染源とする炭疽病の発生生態と防除対策

岩手県では、炭疽病菌がリンゴ樹の着果痕で越冬する事例が多く、この場合は5~6月にかけて感染します。この時期に感染した果実は、長い潜伏期間を経て8月~収穫期および貯蔵中に発病します。炭疽病の重点防除時期は落花10~30日後であり、この時期に本病にも効果のある薬剤を散布することで、効率的に防除できます。



炭疽病は、収穫期に発生する果実腐敗性病害です。これまで本病の伝染源や感染時期については不明な点が多く、その防除法も確立していませんでした。

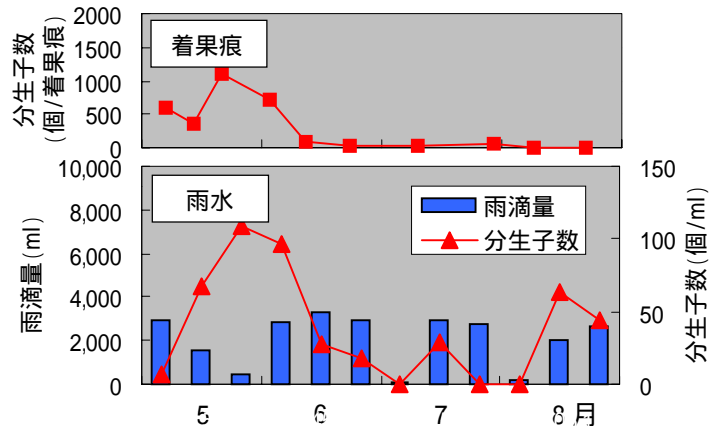


図1 リンゴ着果痕(上)および雨水中(下)の時期別分生子数

炭疽病菌は5~6月にかけて前年の着果痕で増殖し、雨水とともに胞子が飛散します。8月からは樹上発病果から飛散します。

区	散布日			
	5/22 ¹⁾	6/2	6/11	6/23
1				
2	-			
3	-	-		
4				-
5	-	-	-	-

1) 落花10日後

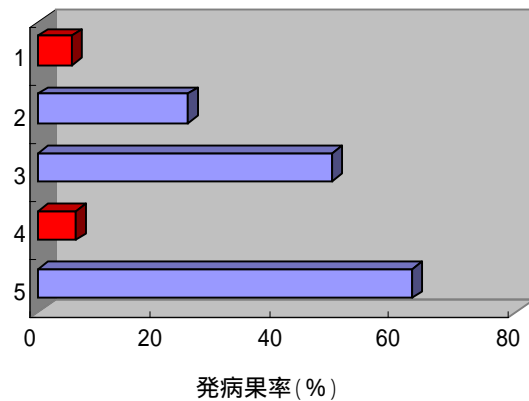


図2 各防除体系のリンゴ炭疽病に対する防除効果(2003年)

試験地：一関市農家圃場(例年多発園) 品種：ふじ(約10年生)
供試薬剤：プロピネブ水和剤(商品名：アントラコール顆粒水和剤500倍)

- 炭疽病菌の胞子飛散が多い落花10日後~40日後の防除効果について調べたところ、1区と4区の防除効果が優れ、落花10日~30日後が重点防除時期であることが分かりました。
- 例年発生が多い園地では、プロピネブ水和剤を重点防除時期に連続散布すると効果的に防除できます。発生が少ない園地では慣行の定期散布剤で防除できます。